

蜻蛉

渋谷栄一 訳

第一章 浮舟の物語 浮舟失踪後の人びとの動転

「第一段 宇治の浮舟失踪」

あちらでは、女房たちが、いらっしやらないのを探して大騒ぎするが、その効がない。物語の姫君が、誰かに盗まれたような朝のようなので、詳しくは話し続けない。京から、先日の使者が帰れなくなってしまったので、気がかりに思って、再び使者をよこした。

「まだ、鶏が鳴く時刻に、出立させなさった」

と使者が言うのと、どのように申し上げようと、乳母をはじめとして、あわてふためることこの上ない。推量しても見当がつかず、ただ大騒ぎし合っているのを、あの事情を知っている者どうしは、ひどく物思いなさつていた様子を思い出すと、「身を投げなさったのか」と思い寄るのであった。

泣きながらこの手紙を開くと、

「とても気がかりなので、眠れませんでしたせいでしょうか、今夜は夢でさえゆっくりと見えません。悪夢にうなされうなされして、気分も普段と違って悪つこざいますよ。やはりとても恐ろしく、あちらにお移りになる日は近くなつたが、その前後に、こちらにお迎え申しませう。今日は雨が降りそつてございますので」

などである。昨夜のお返事を開いて見て、右近はひどく泣く。

「そつであつたか。心細いことを申し上げなさつていたのだ。わたしに、どうして少しもおしやうてくださらなかつたのだらう。幼かつた時から、少しも分け隔て申し上げることもなく、塵ほども隠しだてすることなくやつて

来たのに、最期の別れ路の時に、わたしを後に残して、そのそぶりさえお見せにならなかつたのがつらいことだ」

と思うと、足摺りということをして泣く有様は、若い子供のようにある。ひどくお悩みのご様子は、ずっと拝見して来たが、まったく、このように普通の人と違って大それたこと、お思いつくとは見えなかつた方のお気持ちを、「やはり、どうなさつたことか」と分からず悲しい。

乳母は、かえつて何も分からなくなつて、ただ、「どうしよう。どうしよう」と言っただけであつた。

「第二段 匂宮から宇治へ使者派遣」

宮にも、まことにいつもと違つた様子であつたお返事に、「どのように思つているのだらう。わたしを、そつはいつも愛している様子でいながら、浮気な心だとばかり、深く疑つていたので、他へ身を隠したのであるうか」とお慌てになつて、お使者がある。

居合わせた者たちが泣き騒いでいるところに来て、お手紙も差し上げられない。

「どうしたことか」

と下衆女に尋ねると、

「ご主人様が、今夜、急にお亡くなりになつたので、何もかも分からなくいらつしやいます。頼りになる方もいらつしやらない時なので、お仕えなさつている方々は、ただ物に突き当たつておるおるなさつています」

と言う。事情を深く知らない男なので、詳しくは尋ねないで帰参した。

「どうなつたか」と申し上げさせたところ、夢のようになつて

「まことに大変だ。ひどく悲つていたとも聞いてない。日頃、気分が悪いとばかりあつたが、昨日の返事は変わったこともなくて、いつものよりも興趣があつたものを」

と、「ご想像もおつきにならないので、

時方、行つて様子を見て、はっきりとしたことを尋ね出せ」

とおつしやる。

あの大将殿は、どのようなことか、お聞きになつていることがございませ

たのでしよう、宿直をする者が怠慢である、などと訓戒なさつたと言って、下人が退出するのさえ、注意して調べると言いますので、口実もなくて、時方が参つたのを、事が漏れたりしましたら、お気づきになることがございませう。そうして、急に人のお亡くなりになつた所は、言つまでもなく騒がしく、人目が多くございませうから」と申し上げる。

「そうかといつて、まことに気がかりなままでいられようか。やはり、何か適当に計らつて、いつものように、事情を知っている侍従などに会つて、どうしたわけでこのように言つのか、と尋ねよ。下衆も間違つたことを言うものだ」

とおっしゃるので、お気の毒なご様子も恐れ多くて、夕方に行く。

「第三段 時方、宇治に到着」

身分の軽い者は、すぐに行き着いた。雨が少し降り止んだが、難儀な山道を身を簡略にして、下衆の恰好で来たところ、人が大勢立ち騒いで、

「今夜、このままに葬送申し上げるのです」

などと言つのを聞く気分も、驚き呆れて思われる。右近に案内を乞うたが、会うことはできない。

「ただ今は、何も分かりません。起き上がる気持ちもしません。それにしても、今夜を最後に、このようにお立ち寄りになるのですが、お話しできませんことが」

と言わせた。

「そうは言つても、このようにはつきり分かりませんでは、どうして帰参できません。せめてもうお一方にでも」

と切に言つたので、侍従が会つたのであつた。

「まことに呆れたことです。自身も思いがけない様子でお亡くなりになつたので、悲しいと言つても言い足りず、夢のようで、誰も彼もが途方に暮れています旨を申し上げてくださいませ。少しでも気分が落ち着きましたら、日頃、物思いなさつていた様子や、先夜、ほんとうに申し訳なくお思い申し上げていらした有様などを、お聞かせ申し上げませう。この穢など、世間の人々が忌む期間が過ぎてから、もう一度お立ち寄りくださいませ」

と言って、泣く様子はまことに大変である。

「第四段 乳母、悲嘆に暮れる」

内側でも泣く声ばかりがして、乳母であるつ、

「わが姫君は、どこに行かれてしまったのか。お帰りください。むなしい亡骸をさえ拜見しないのが、効なく悲しいことよ。毎日拜見しても物足りなくお思い申し、早く立派なご様子を拜見しようと、朝夕にお頼み申し上げていたので、寿命も延びました。お見捨てになつて、このように行く方もお知らせにならないこと。

鬼神も、わが姫君をお取り申すことはできません。皆がたいそう惜しむ人を、帝釈天もお返しになるといつ。姫君をお取り申し上げたのは、人であれ鬼であれ、お返し申し上げます。御亡骸を拜見したい」

と言いつけるが、合点の行かないことがあるのを、変だと思つて、

「やはり、おっしゃってください。もしや、誰かがお隠し申し上げなされたのか。確かな事をお聞きなさるうつとして、自身のお代わりに出立させなされたお使いです。今は、何にしても効のないことですが、後にお聞き合わせになることがございませうが、違つたことがございましたら、聞いて参つたお使いの落度になるでしょう。」

また、そのようなことはあるまいと信頼あそばして、あなた方にお会いせよ』と仰せになつたお気持ちを、もつたいたいとはお思いになりませんか。女の道に迷いなさることは、異国の朝廷にも、古い幾つもの例があつたが、またこのようなことは、この世にない、と拜見しています」

と言つので、おっしゃるとおり、まことに恐れ多いお使いだ。隠そうとしても、こうして珍しい事件の様子は、自然とお耳に入るつ、と思つて、

「どうして、少しでも、誰かがお隠し申し上げなされたら、と思ひ寄るようなことがあつたら、こんなにも皆が泣き騒ぐことがございませうか。日頃、とてもひどく物を思いつめているようでしたので、あの殿が、厄介なことに、ちらつとおっしゃつてくることなどもありました。

お母上でいらつしやる方も、このように大騒ぎする乳母なども、初めから知り合つた方のほうにお引越しなさるつ、と準備し出して、宮とのこ

關係を、誰にも知られない状態にばかり、恐れ多くもつたいたいとお思い申し上げていらつしやいましたので、お気持ちも乱れたのでしよう。驚き呆れますが、ご自分から身をお亡くになつたようなので、このように心の迷いに、愚痴つぽく言い続けてしまつたのでしよう。」

と、そうはいつても、ありのままにはなく暗示する。合点が行かず思われて、

「それでは、落ち着いてから参りましょう。立ちながら話しますのも、まことに簡略なようです。いずれ、宮ご自身でもお出でになりましょう。」

と言つと、

「まあ、恐れ多い。今さら、人がお知り申すのも、亡きお方のためには、かえつて名譽なご運勢と見えることですが、お隠しになつていた事なので、またお漏らしあそばさないで、終わりなさることが、お気持ちに從つてしよう。」

こちらでは、このように異常な形でお亡くなりになつた旨を、人に聞かせまいと、いろいろと紛らわしているが、自然と事件の子細も分かつてしまふのでは、と思つと、このように勧めて歸らせた。

「第五段 浮舟の母、宇治に到着」

雨がひどく降つたのに隠れて、母君もお越しになつた。まったく何とも言いようなく、

「目の前で亡くなつた悲しさは、どんなに悲しくあつても、世の中の常で、いくらでもあることだ。これは、いったいどうしたことか。」

とつろつろする。このような込み入つた事件があつて、ひどく物思いなさつていたとは知らないで、身を投げなかつたとは思ひも寄らず、

「鬼が喰つたのか。狐のような魔物が連れさらつたのか。まことに昔物語の妙な事件の例にか、そのような事も言つていた。」

と思ひ出す。

「それとも、あの恐ろしいとお思い申し上げる方の所で、意地悪な乳母のよくな者が、このようにお迎えになる予定と聞いて、目障りに思つて、誘拐を企んだ人でもあつるか。」

と、下衆などを疑つて、

「新参者で、氣心の知れない者はいないか。」

と尋ねるが、

「とても世間離れた所だといつて、住み馴れない新参者は、こちらではちよつとしたこともできず、又すぐに参上しましょう。」と言つては、皆、その引つ越しの準備の物などを持つては、京に歸つてしまいました。」

と言つて、元からいる女房でさえ、半分はいなくなつて、まことに人数少ないときであつた。

「第六段 侍従ら浮舟の葬儀を営む」

侍従などは、日頃のご様子を思い出して、死んでしまいたいなどと、泣き入つていらした時々の様子、書き置きなさつた手紙を見ると、「亡くなつた後形に」と書き散らしていらつしやつたものが、硯の下にあつたのを見て、川の方角を見やりながら、「こつこつと轟いて流れている川の音を聞くにつけても、氣味悪く悲しいと思ひながら、

「こつこつと、お亡くなりになつた方を、あれこれと噂し合つて、どなたもどなたも、どのようなふうにお亡くなりになつたのか、とお疑いになるのも、お氣の毒なこと。」

と相談し合つて、

「秘密の事とは言つても、ご自身から引き起こした事ではない。母親の身として、後に聞き合わせなさつたとしても、別に恥ずかしい相手ではないのを、ありのままに申し上げて、このようにひどく氣がかりなことまで加わつて、あれこれ思い迷つていらつしやる様子は、少しは合点の行くようにして上げよう。お亡くなりになつた方としても、亡骸を安置し申うのが、世間一般であるが、世間の例と変わった様子で幾日もたつたら、まったく隠しおおせないだろう。やはり、申し上げて、今は世間の噂だけでも取り繕ひましょう。」

と相談し合つて、こつそりと生前の状態を申し上げると、言う人も正氣を失つて、言葉も続かず、聞く気持ちも乱れて、「それでは、このとても荒々しい川に、身を投じて亡くなつたのだ。」と思つと、ますます自分も落ち込

んでしまいそうな気がして、

「流れて行かれた方角を探して、せめて亡骸だけでもちゃんと葬儀したい」とおっしゃるが、

「全然何の効もありません。行く方も知れない大海原にいらっしゃったでしょう。それなのに、人が言い伝えることは、とても聞きにくい」

と申し上げるので、あれやこれやと思つと、胸がこみ上げてくる気がして、どうにもこうにもなすすべもなく思われなさるが、この女房たち二人で、車を寄せさせて、ご座所や、身近にお使いになつたご調度類など、みなそのままそっくり脱いで置かれた御衾などのようなものを詰めこんで、乳母子の大徳や、その叔父の阿闍梨、その弟子の親しい者など、昔から知つていた老法師など、御忌中に籠もる者だけで、人が亡くなつた時の例にまねて、出立させたのを、乳母や、母君は、まことにひどく不吉だと倒れ転ぶ。

「第七段 侍従ら真相を隠す」

大夫や、内舎人など、脅迫申し上げた者どもが参つて、

「ご葬送の事は、殿に事情を申し上げさせなさつて、日程を決められて、殿かにお勤め申し上げるのがよいでしょう」

などと云つたが、

「特別に、今夜のうちに行いたいです。たいそうこつそりにと云つて、いるところがありますので」

と云つて、この車を、向かいの山の前の野原に行かせて、人も近くに寄せず、この事情を知つてゐる法師たちだけで火葬させる。まことにあつけなくて、煙は消えた。田舎者どもは、かえつて、このようなことを仰々しくして、言忌などを深くするものだったのだ。

「まことに変なこと。きまりの作法などが、あることもなさらずに、いかにも下衆のようになつて、あつけなくなつたことよ」と非難する。

「兄弟などのいらつしやる方は、わざとこのように、京の方はなさる」などと、いろいろと感心しないことを言つのであつた。

「このような者どもが言つたり思つたりするだけでも憚れるのに、それ以上

に、噂が漏れて広がる世の中では、大将殿あたりで、亡骸もなくお亡くなりになつた、とお聞きになつたら、きつとお疑いになることがあるが、宮もまた、親しいお間柄であるから、そのような人がいらつしやるかいらつしやらないかは、しばらくの間は隠していると疑つても、いつかは明らかになるであろう。

また一方、きつと宮だけをお疑い申し上げることはなさらないだろう。どのような人が連れて行つて隠したのだらうなどと、お考え寄りになるだろう。生きていらした間のご運勢は、とても高くいらした方が、なるほど亡くなつて後は、たいへんな疑いをお受けになるのだらうか」

と思つと、この家にいる下人どもにも、今朝の慌ただしかった騒動に、その様子を見たり聞いたりした者には口止めをし、事情を知らない者には聞かせまい」などとごまかしたのであつた。

「年月が経つたら、どちらにも、静かに、生前のご様子を申し上げよう。ただ今は、悲しみも覚めるようなことを、ふと人伝てにお聞きなさると、やはりとてもお気の毒なことになるであろう」

と、この人ら二人は、深く良心が咎めるので、隠すのであつた。

第二章 浮舟の物語 浮舟失踪と薫、匂宮

「第一段 薫、石山寺で浮舟失踪の報に接す」

大将殿は、母入道の宮がお悩みになつたので、石山寺に参籠なさつて、おとりこみの最中であつた。そうして、ますますあちらを気がかりに思ひになつたが、はつきりと、「こうだ」と言つ人がいなかったので、このような大変な事件にも、まっさきにご使者がないのを、世間体もつらいと思うが、御莊園の者が参上して、「これこれしかじかです」とご報告申し上げさせたので、驚き呆れた気がなさつて、ご使者が、その翌日のまだ早朝に参上した。

「一大事は、聞くなりすぐに自分が駆けつけるべきところ、このように病気でいらつしやる御事のために、身を清めて、このような所に日数を決め

て参籠しておりますので。昨夜の事は、どうして、こちらに連絡して、日を延期してでもそういうことはするべきものを、たいそう簡略な様子で、急いでなさったのか。どのようにしたところで、同じく言っても始まらないことだが、最後の葬儀さえ、山賤の非難を受けるのが、わたしにとつてもつらい」

などと、あの信任厚い大蔵大輔を使者としておっしゃった。お使いが来たことにつけても、ますます悲しいので、何とも申し上げようのないことなので、ただ涙にくれているだけを口実にして、はつきりともお答え申し上げずに終わった。

「第二段 薫の後悔」

殿は、やはり、実にあつけなく悲しいとお聞きなるにも、

「何という嫌な土地であるう。鬼などが住んでいるのだらうか。どうして、今までそのような所に置いておいたのだらう。思いがけない方面からの過ちがあつたようなのも、こうして放つておいたので、気楽さから、宮も言い寄りなされたのだらう」

と思うにつけても、自分の迂闊で世間離れた心ばかりが悔やまれて、お胸が痛く思われなさる。お悪いあそばしているところで、このような事件で「困惑なさるのも不都合なことなので、京にお帰りになつた。

宮の御方にもお渡りにならず、

「大したことはございませんが、不吉な事を身近に聞きましたので、気持ち静まらない間は縁起でもないのです」

などと申し上げなされて、どこまでもはかなく無常の世をお嘆きになる。生前の容姿、まことに魅力的で、かわいらしかった雰囲気などが、たいそう恋しく悲しいので、

「現世には、どうしてこのようにも夢中にならず、のんびりと過ごしていたのだらう。今では、まったく気持ちを静めるすべもないままに、後悔されるのが数知れない。このような方面の事につけて、ひどく物思いをする運命なのだ。世人と異なつて道心を身上とした人生なのに、思いの外に、このように普通の人のように生き永らえているのを、仏などが憎いと御覽に

なるのではなからうか。人に道心を起こさせようとして、仏がなさる方便は、慈悲をも隠して、このようになさるのであるうか」

と思ひ続けなさりながら、勤行ばかりをなさる。

「第三段 匂宮悲しみに籠もる」

あの宮はまた宮で、彼以上に、二、三日は何も考えることができず、正気もない状態で、どのような御物の怪であるうか」などと騒ぐうち、だんだんと涙も流し尽くして、お気持ちが静まって、生前の「ご様子が恋しく悲しく思ひ出されなさるのであった。周囲の人には、ただ「病気が篤い様子ばかりに見せて、」このような無性に涙顔でいる様子を知らせまい」と、気強く隠そうとお思ひになつたが、自然とはつきりしていたので、

「どのような事にこんなに「困惑なさり、お命も危ないまでに嘆き沈んでいらつしやるのだらう」

と、言う人もいたので、あちらの殿におかれても、とてもよくこのご様子をお聞きになると、そうであつたか。やはり、単なる文通だけではなかつたのだ。御覧になつては、きっとそのように熱中なさるはずの女である。もし生きていたら、他人の関係以上に、自分にとつて馬鹿らしい事が出て来るところだつた」とお思ひになると、恋い焦がれる気持ちも少しは冷める気がなされた。

「第四段 薫、匂宮を訪問」

宮のお見舞いに、毎日参上なさらない方はなく、世間の騒ぎとなつていくころ、大した身分でもない女のために閉じ籠もつて、参上しないのも変だらう」とお思ひになつて参上なさる。

そのころ、式部卿宮と申し上げた方もお亡くなりになつたので、御叔父の服喪で薄鈍でいるのも、心中しみじみと思ひよそえられて、ふさわしく見える。少し顔が痩せて、ますます優美さがまさつていらつしやる。お見舞い客が退出して、ひっそりとした夕暮である。

宮は、臥せつて沈んでばかりいられないお気持ちなので、疎遠な客にはお会いにならないが、御簾の内側にもいつもお入りになる方には、お会いなさらないことできません。顔をお見せになるのも何となく気がひける。お会いなさるにつけても、ますます涙が止めがたいのをお思いになるが、冷静になつて、

「大した病気ではございませんが、誰もが、用心しなければならぬ病状だ、とばかり言うので、帝におかれても母宮におかれても、御心配なさるのがとてもつらくて、なるほど、世の中の無常を、心細く思つております」

とおっしゃつて、押し拭つてお隠しになろうとする涙が、そのまま防ぎようもなく流れ落ちたので、たいそう体裁が悪いが、必ずしもどうして気がつこつたか。ただ女々しく心弱い者のように見るだろうとお思いになるが、「そつであつたのか。ただこの事だけをお悲しみになつていたのだ。いつから始まつたのだろうか。自分を、どんなにも滑稽に物笑いなさるお気持ちで、この幾月もお思い続けていらしたのだろうか」

と思つと、この君は、悲しみはお忘れになつたが、

「何とまあ、薄情な方であろうか。物を切に思う時は、ほんとこのような事でない時でさえ、空を飛ぶ鳥が鳴き渡つて行くのにつけても、涙が催されて悲しいのだ。わたしがこのように何となく心弱くなつて居るのにつけても、もし真相を知つても、それほど人の悲しみを分らない人ではない。世の中の無常を身にしてみ思つて居る人は冷淡でいられることよ」

と、羨ましくも立派だともお思いなさる一方で、女のゆかりと思つたなつかしい。この人に向かい合つて居る様子を「ご想像になると、形見ではないか」と、じつと見つめていらつしやる。

「第五段 薫、匂宮と語り合つ」

「だんだんと世間の話を申し上げなされると、とても隠しておくこともあるまい」とお思いになつて、

「昔から、胸のうちに秘めて少しも申し上げなかつたことを残してあります間は、ひどくうつとうしくばかり存じられましたが、今は、かえつて身分も高くなりました。わたくし以上に、お暇もないご様子で、のんびりとし

ていらつしやる時もございせんので、宿直などにも、特に用事がなくては伺ふこともできず、何となく過ごしてあります。

昔、御覧になつた山里に、あつけなく亡くなつた方の、同じ姉妹に当たる人が、意外な所に住んで居ると聞きつけまして、時々逢いもしようか、と存じておりましたが、不都合にも世間の人の非難もきつとあるような時でしたので、あの山里に置いておきましたところ、あまり行つて逢うこともなく、また一方、女も、わたくし一人を頼りにする気持ちも特になつたのであろうか、と拝見しましたが、れつきとした重々しい扱いをいたす夫人ならともかく、世話するのには、格別の落度もございせんのに、気楽でかわいらしいと存じておりました女が、まことにあつけなく亡くなつてしまいました。すべて世の中の有様を思い続けますと、悲しいことだ。お聞き及びのこともございませう」

と言つて、今初めてお泣きになる。

この方も、まこと涙顔はお見せ申すまい。馬鹿らしいと思つたが、いったん流れ出しては止めがたい。態度がやや取り乱しているようなので、いつもと違つて居る、気の毒だ」とお思いになるが、平静を装つて、

「まことにお気の毒なことを。昨日ちらつと聞きました。どのようにお悔やみ申し上げようかと存じながら、特に世間にお知らせなさらないことと、聞きましたので」

と、さりげなくおっしゃるが、とても我慢できないので、言葉少なくいらつしやる。

「適当なお方としてお目にかけたい、と存じておりました女でした。自然とそのようなこともございましてしょうか、お邸にも出入りする縁故もございしたので」

などと、少しづつ当てこすつて、

「ご気分がすぐれないうちは、つまらない世間話をお聞きになつて、驚きなさるのも、つまらないことです。どうぞ大事になさつてください」
などと、申し上げ置いて、お帰りになつた。

「第六段 人は非情の者に非ず」

「ひどく執心であつたな。まことにあつけなかつたが、やはりよい運勢の女であつた。今上の帝や、后が、あれほど大切になさつていらつしやる親王で、顔かたちをはじめとして、今の世の中には他にいらつしやらないよ。うだ。寵愛なざる夫人でも、並一通りでなく、それぞれにつけて、この上ない方をさしておいて、この女にお気持ちを尽くし、世間の人が大騒ぎして、修法、読経、祈祷、被いと、それぞれ専門に騒ぐのは、この女に執着したための、ご病氣であつたのだ。

「自分も、これほどの身分で、今上の帝の内親王をいただきながら、この女がいじらしく思えたのは、宮に負けていようか。それ以上に、今は亡き人かと思つと、心の静めようがない。とはいへ、愚かしいことだ。そうはすまい」

「と我慢するが、いろいろと思ひ乱れて、人は木や石ではないので、みな感情をもっている」

「と、口ずさみなさつて臥せつていらつしやつた。

後の葬送なども、まことに簡略にしてしまつたのを、宮におかれてもどようにお聞きになるうか」と、お氣の毒で張り合ひがないので、母が普通の身分で、兄弟のある人はなどと、そのような人は言うことがあるといふのをおもつて、簡略にするのであつたらう」などと、氣にくわなくお思ひになる。

「氣がかりさも限りがないので、その時の實際の様子を自分でも聞きたくお思ひになるが、長い忌籠もりなさるのも不都合である。行くには行つてもすぐ帰るのは心苦しい」などと、ご思案なさる。

第三章 匂宮の物語 匂宮、侍従を迎えて語り合ふ

「第一段 四月、薫と匂宮、和歌を贈答」

「月が変わつて、今日が引き取る日であつたのに」と思ひ出しなかつた夕暮、まことにもの悲しい。御前近くの橋の香がやさしい感じのところ、ほととぎすが二声ほど鳴いて飛んで行く。亡くなつた人の所に行くなら」と

「独り言をおつしやつても物足りないので、北の宮邸に、そこにお渡りになる日であつたので、橋を折らせて申し上げなさる。」

「忍び音にほととぎすが鳴いていますが、あなた様も泣いていらつしやいましょうか。いくら泣いても効のない方にお心寄せならば」

「宮は、女君のご様子がとてもよく似ているのを、しみじみとお思ひになつて、お二方で物思ひに耽つていらつしやるころであつた。意味のありそつな手紙だ」と御覧になつて、

「橋が薫つているところは、ほととぎすよ。氣をつけて鳴くものですよ。迷惑なことを」

とお書きになる。

「女君は、この事件の経緯は、みなご存知なのであつた。しみじみと言ひようもないほどあつけなかつた、あれこれにつけて感慨深い中で、自分一人が物思ひを知らないの、今まで生き永らえていたのであつたらうか。それをもいつまで続くやら」と心細くお思ひになる。宮も、隠すことのできないものから、分け隔てなさるのもとてもお氣の毒なので、生前の様子などを、少し取り繕ひながらお話し申し上げなさる。

「隠していらつしやつたのがつらかつた」

「などと、泣いたり笑つたりしながら申し上げなさるにつけても、他の人よりは親しみを感じ胸を打つ。大げさに格式ばつて、ご病氣の件でも、大騒ぎをなさる所では、お見舞い客が多くて、父大臣や、兄の公達がひつきりなしなのも、とてもうるさいが、ここはたいそう氣楽で、慕わしい感じにお思ひなさるのであつた。」

「第二段 匂宮、右近を迎えに時方派遣」

「まことに夢のようにばかり、やはり、どうして、とても急なことであつたのか」とばかり氣が晴れないので、いつもの人びとを召して、右近を迎えにやる。母君も、まったくこの川の音や感じを聞くと、自分もころがり込んでしまひそう、悲しく嫌なことが休まる間もないので、とても侘しくお歸りになつたのであつた。

念仏の僧どもを頼りとする人として、たいそうひっそりしているところ

るにやつて来たので、嚴重に、急に警戒していた宿直人どもも、見咎めない。

「皮肉にも、最期の折にお入れ申し上げることができずに終わってしまったことよ」と、思い出すのもおいたわしい。

「とんでもないことをご執着なさったことよ」と、見苦しく拝見したが、こちらに来ては、お越しになった夜々の有様や、お抱かれなさつて、舟にお乗りになった感じが、上品でかわいらしかったことなどを思い出すと、気丈な人などもなくしみじみとなる。右近が会つて、ひどく泣くのも道理である。

「このようにおつしやるので、お使いに来ました」

と言つと、

「今さら、皆が変だと言ひ思うのも気がひけまして、参上しても、はきはきとご納得の行くようには、何か申し上げられそうな気がしません。この忌中が終わつて、ちよつとどこそこにと人に言つても、少しふさわしいころになつてから、思ひの他に生きていましたら、少し気持ちが静まつたよくなつた時に、ご命令がなくても参上して、おつしやるようにとても夢のようだった事柄を、お話し申し上げとう存じます」

と言つて、今日は動きそうにもない。

「第三段 時方、侍従と語る」

大夫も泣いて、

「まつたく、お二方の事は、詳しくは存じ上げません。物の道理もわきまえていませんが、無類のご寵愛を拝見しましたので、あなた方を、どうして急いでお近づき申し上げよう。いずれはお仕えなさるはずの方だ、と存じていました。何とも言いようもなく悲しいお事の後は、わたし個人としても、かえつて悲しみの深さがまさりまして」

と懇切に言つ。

「わざわざお車などをお考えめぐらされて、差し向けなさつたのを、空っぽで帰るのは、まことにお気の毒です。もうお一方でも参上なさい」

と言つので、侍従の君を呼び出して、

「それでは、参上なさい」

と言つと、

「あなた以上に何を申し上げることができません。それにしても、やはり、この忌中の間にはどうして。お願いあそばさないのでしょつか」

と言つと、

「ご病気で大騒ぎをして、いろいろなお慎みがございますようですが、忌明けをお待ち切れになれないようなご様子です。また、このように深いご宿縁では、忌籠もりあそばすのでいらつしやいませう。忌明けまでの日も幾日でもない。やはりお一方参上なさい」

と責めるので、侍従が、以前のご様子もとても恋しく思い出し申し上げるので、いつの世にかお目にかかることができようか、この機会に」と思つて参上するのであつた。

「第四段 侍従、京の匂宮邸へ」

黒い衣装類を着て、化粧をした容貌もとても美しそつである。裳は、今後は自分より目上の人はいないとつかりして、色も染め変えなかつたので、薄い紫色のを持たせて参上する。

「生きていらつしやつたら、この道を人目を忍んでお出になるはずだつたのに。人知れずお心寄せ申し上げていたのに」などと思つにつけ悲しい。道中泣きながらやつて来た。

宮は、この人が参つた、とお耳にあそばすにつけてもお胸が迫る。女君には、あまりに憚れるので、申し上げなさらぬ。寢殿にお出でになつて、渡殿に降ろさせなかつた。生前の様子などを詳しくお尋ねあそばすと、日頃お嘆きになつていた様子や、その夜にお泣きになつた様子を、

「不思議なまでに言葉少なく、ほんやりとばかりしていらつしやつて、大変だと思ひになることも、他人にお話しになることはめつたになく、遠慮ばかりなさつたせいでしょつか、言い残しなさることもございませぬ。夢にも、このような心強いことをお覚悟だつたとは、存じませぬでした」

などと、詳しく申し上げると、ひとしお実に悲しく思われて、前世からの因縁で、病死などすることなどよりも、どんなに覚悟なさつて、そのよくな川の中に溺死したのだらう」とお思いやりなさると、その場を見つ

「お止めできたら」と、煮えかえる気持ちかなさるが、どうしようもない。
「お手紙をお焼き捨てになったことなどに、どうして不審に思わなかったの
でございましょう」

などと、一晩中お聞きなされるので、お話し申し上げて夜が明ける。あの
巻数にお書きつけになった、母君の返事などを申し上げます。

「第五段 侍従、宇治へ帰る」

何程の者ともお考えでなかった侍従も、親しくしみじみと思われなさる
ので、

「わたしの側にいなさい。あちらにも縁がないではない」
とおっしゃる。

「そのようにして、お仕えますにつけても、何となく悲しく存じられます
ので、もう暫くこの御思みなどを済ませましてから」

と申し上げる。再び参るように「などと、この人までも、別れがたくお
思いになる。

早朝に帰る時に、あの方の御料にと思つて準備なさつていた櫛の箱一具、
衣箱一具を、贈物にお遣わしになる。いろいろとお整えさせになったこと
は多かつたが、仰々しくなつてしまいそうなので、ただ、この人に与える
のに相応な程度であつた。

「何も考えなく参上して、このようないことがあつたのを、女房はどのよう
に見るだろうか。何となく厄介なことだわ」

と困るが、どうして辞退申し上げられよう。

右近と二人で、こっそりと見ながら、所在ないままに、精巧で今風に仕
立ててあるのを見て、ひどく泣く。装束もたいそう立派に仕立て上げら
れたものばかりなので、

「このような服喪期間中なので、これをどう隠したのか」
などと、困るのであつた。

「第一段 薫、宇治を訪問」

大将殿も、同じように、まことに不審でしようがないので、思い余りな
さつてお出でになつた。道中から、昔の事を一つ一つ思い出して、

「どのような縁で、この父親王のお側に来初めたのだろう。このように思い
もかけなかつた人の最期まで世話をし、この一族のことについては、物思
いばかりすることよ。たいそう尊くおいでになつた所で、仏のお導きによつ
て、来世ばかりを祈願していたのに、心汚い末路の思惑違いによつて、世
の無常を思い知らせるようだ」

と思われなさる。右近を召し出して、

「生前の様子もはつきりとは聞かず、やはり、尽きせず呆れて、あつけない
ので、忌中期間も少なくなつた。過ぎてから、と思つていたが、抑えきれず
にやつて来たのです。どのような気持ちで、お亡くなりになつたのですか」
とお尋ねなさると、尼君なども、経緯は知つてしまつたので、結局はお
聞き合わせになるであろうから、なまじ隠しだしても、話がくいちがつ
て聞かれるのも、具合の悪いことにならう。変な話には、嘘を考えて何度
も言つてきたが、このような真面目な態度のお前に対座申し上げては、前
もつて、ああ言おう、こう言おうと、用意していた言葉も忘れ、困ること
と思われたので、生前の様子のあれこれを申し上げた。

「第二段 薫、真相を聞きただす」

驚き呆れて、思いもかけなかつたことなので、一言も暫くの間はおっしゃ
れない。

「難とも信じがたいと思われることだ。普通誰でもが思つたり言つたりする
ことも、この上なく言葉少なく、おつとりしていた人が、どうしてそのよ
うな恐ろしいことを思い立つたのだろう。どのような様子のために、この
人びとは、取り繕つて言つのであろうか」

とお気持ちもいっそう困惑なさるが、宮もお嘆きになつていた様子、ま
ことにはつきりしていたし、事の成り行きも、そんなそ知らぬふりを装つ

た態度は、自然と分かつてしまうものだから、このようにお出でになつたにつけても、悲しくてやりきれないことを、身分の上下の人が皆集まつて泣き騒いでいるのだから」と、お聞きになると、

「お供をしていなくなつた人はいないか。さらに、その時の状況をはずきり言いなさい。わたしを薄情だと思つてお裏切になることは、決してないと思つ。どのような、急に、わけの分からぬことがあつてか、そのようなことをなさつたのだろう。わたしは信じていることができない」

とおつしやるので、「一段として、心配していたとおりであつたよ」と厄介なことに思つて、

「自然とお耳に入つておりましよう。初めから不如意な境遇でお育ちになりました方で、人里離れたお住まいで暮らした後は、いつとなく物思ひばかりをなさつていたようでしたが、たまにこのようにお越しになりますのを、お待ち申し上げなされることで、もともとのお身の上の不幸までをお慰めになりながら、のんびりとした状態で、時々お逢い申し上げなされるように早く早くとばかり、言葉に出してはおつしやいませんが、ずっとお思ひでいらしたらしいのを、そのご念願が叶うように承つたことがございましたのに、こうしてお仕える者どもも、嬉しいことと存じて準備致し、あの筑波山の母君も、やつとのことで念願が叶つたような様子で、お移りになることをご準備なさつていたのに、納得できないお手紙がございましたので、ここの宿直などに仕える者どもも、女房たちがふしだらなようだ、などと、厳しくご命令なさつたことなどを申して、物の情理をわきまえない荒々しいのは田舎者どもの、間違ひでもあつたかのように取り扱ひ申すことがございましたが、その後、長らくお手紙などもございませんでしたので、情けない身の上だとばかり、幼かつた時から思ひ知つていたが、何とか一人前にしようとばかり、いろいろとお世話なさつていた母君が、なじその事によつて、世間の物笑いになつたら、どんなに嘆くだろう、などと悪いほうに考えて、いつも嘆いていらつしやいました。

その方面より他に、何があるうかと、考えめぐらして見ますに、思い当たることはございません。鬼などがお隠し申したとしても、少しは残るものがございませんと聞いておりますものを」

と言つて、泣く様子もたいそうなので、「どのようなことか」とお疑ひ

になつていた気持ちも消えて、お涙が抑えがたい。

「第三段 薫、匂宮と浮舟の關係を知る」

「わたしは思いどおりに振舞つこともできず、何事も目立ってしまう身分であるから、気がかりだと思つ時にも、いずれ近くに迎えて、何の不満足もなく、世間体もよく持てなして、将来末長く添い遂げよう、とはやる心を抑えながら過ごして来たが、冷淡だとおとりになつたのは、かえつて他に分ける心がおありだつたのだろう、と思われます。

今さら、こんなことは言うまいと思つが、他に人が聞いているのならともかくだが、宮のお事ですよ。いつから始まつたのでしょうか。そのようなことが原因でか、まことに不都合にも、女の心を迷わしなされる宮だから、いつもお逢いできない嘆きで、身をなきものにされたのか、と思つ。ぜひ、言え。わたしには、少しも隠すな」

とおつしやると、「確かな事をお聞きになつてゐるのだ」と、とても困つてしまつて、

「まことに情けないことをお聞きになつたようでございます。右近めもお側に伺候していません折はございませんでしたものを」

と物思ひにふけりためらつて、

「自然とお聞き及びになつたことでございます。この宮の上のお所に、こつそりとお行きになつたとき、呆れたことに思ひがけない間に、お入りになつて来ましたが、たいそう手厳しいことを申し上げまして、お出になりました。その事に恐がりなさつて、あの見苦しうございました隠れ家にお移りになつたのです。

その後は、噂としても知られまい、とお思ひになつて終わつたのを、どうしてお耳にあそばしたのでしょうか。ちよつと、この二月頃から、お便りを頂戴するようになりしたのでしょう。お手紙は、とても頻繁にございましてようですが、御覧になることもございませんでした。まことに恐れ多く、失礼な事になりましたと、右近めなどが申し上げましたので、一度か二度はお返事申し上げましたでしょうか。それ以外の事は存じませんと申し上げる。」

「このように言うに決まっていることなのだ。無理に問い質すのも気の毒だから」と、つくづくと物思いに耽りながら、

「宮をめつたにないといふ方と思い申し上げても、自分のほうをやはりいい加減には思っていないため、どうしたらよいか分からなくなつて、頼りない考えで、この川に近いのを手だてにして、思いついたのである。自分がここに放つて置かなかつたら、たいそうつらい生活であつても、どうして、必ず深い谷を探して身投げをしなかつただらうに」

と、ひどく嫌な川の名の縁であるよ」と、この川が疎ましく思われなさること、甚だしい。長年、恋しいと思われなさつていた所で、荒々しい山路を行き来したのも、今では、また情けなくて、この里の名を聞くのさえ耐えがたい気がなされる。

「第四段 薫、宇治の過去を追懐す」

「宮の上が、おっしゃり始めた、人形と名付けたのまでが不吉で、ただ、自分の過失によって亡くした人である」と考え続けて行くと、母親がやはり身分が軽いので、葬送もとても風変わりな、簡略にしたのであつた」と合点が行かず思つていたが、詳しくお聞きになると、

「どのようになつてゐるだらう。あの程度の身分の子としては、まことに結構であつた人を、秘密の事は必ずしも知らないで、自分との縁でどのようなことがあつたのであつたらう」と思つてゐるであらう」

などと、いろいろとお氣の毒にお思いになる。穢れということはないであらうが、お供の人の目もあるのです、お上がりにならず、お車の榻を召して、妻戸の前で座つていたのも、見苦しいので、たいそう茂つた樹の下で、苔をお敷物として、暫くお座りになつた。今ではここに來て見ることをさえつらいことであらう」とばかり、まわりを御覧になつて、

「わたしもまた、嫌なこの古里を離れて、荒れてしまつたら、誰がここの宿の事を思い出すであらうか」

阿闍梨は、今では律師になつてゐた。呼び寄せて、この法事の事をお命じ置きになる。念仏僧の数を増やしたりなどおさせになる。罪障のとても深いことだ」とお思いになると、その軽くなることをするように、七日七

日ごとにお経や仏を供養するようになど、こまごまとお命じになつて、たいそう暗くなつたのでお帰りになるのも、もしも生きていたら、今夜のうちに帰らうか」とばかりである。

尼君にも挨拶をおさせになつたが、

「とてもとても不吉な身だとはかり存じられ沈み込んで、ますます何も考えられず、茫然として、臥せつております」

と申し上げて、出て來ないので、無理してはお立ち寄りにならない。

道中、早くお迎えしなかつたことが悔しく、川の音が聞こえる間は、心も落ち着きなならず、亡骸さえも捜さず、情けないことに終わつてしまつたなあ。どのような状態で、どこの川底に貝殻とともにいるのであつたらうかと、やるせなくお思いになる。

「第五段 薫、浮舟の母に手紙す」

あの母君は、京で子を産む予定の娘のことによつて、穢れを騒ぐので、いつものわが家にも行かず、心ならずも旅寝ばかり続けて、思い慰む時もないので、また、この娘もどうなるのだらうか」と心配するが、無事に出産したのであつた。穢れているので、立ち寄ることもできず、残りの家族のことも考えられず、茫然として過ごしてゐると、大將殿からお使いがこつそりと來た。何も考えられない気持ちにも、たいそう嬉しく感動した。

「あまりの出来事に、さうそくお見舞い申そうと存じてましたが、気持ちも落ち着かず、目も涙に暮れた心地がして、それ以上にどんなにか心が闇に暮れていらつしやるだらうかと、暫く待つていましたうちに、あつという間に幾日もたつてしまつたこと。世の中の無常も、ますます呑気に構えていられない気がしますが、案外に生き永らえましたら、亡くなつた方の縁者として、きつと何かの時には声をかけてください」

などと、こまごまとお書きになつて、お使いには、あの大蔵大輔を差し向けなさい。

悠長に万事を構えて、幾年もたつてしまつたので、必ずしも誠意があるようには御覧にならなかつたでしょう。けれども、今からは、何事につけても、必ずお忘れ申し上げまい。また、そのように内々にお思いおきくだ

さい。幼いお子様もいると聞いていますが、朝廷にお仕えなさるにつけても、必ず力添えしましょう」

などと、口頭でもおっしゃった。

「第六段 浮舟の母からの返書」

たいそう嚴重に慎まなくてもよい穢れなので、大して穢れに触れていません」などと言って、強いて招じ入れた。お返事は、泣きながら書く。

「大変な悲しみにも死ぬことができません命を、情けなく存じ嘆いておりますが、このような仰せ言を拝見するためだったのでしょうか、と思えます。

長年、心細い様子を拝見しながら、それは一人前でない身のつたなさのせいであると存じましたが、恐れ多いお言葉を、将来未長くご信頼申し上げておりましたが、何とも言いようのない事になってしまつて、里の名の縁もまことに情けなく悲しうございます。

いろいろと嬉しい仰せ言を戴き、寿命も延びまして、もう暫く長生きしましたら、やはり、お頼り申し上げますこと、と存じますにつけても、目の前が涙に暮れまして、何事も申し上げ切れません」

などと書いた。お使いに、普通の祿では見苦しいときである。不満足な気もするにちがいないので、あの君に差し上げようと用意して持つていた、立派な斑犀の帯や、太刀の素晴らしいなどを、袋に入れて、車に乗る時に、

「これは故人のお志です」

と言って、贈らせた。

殿に御覧に入れると、

「今さらしなくてもよいことをしたものだな」

とおっしゃる。口上には、

「自身がお会いくださつて、ひどく泣きながらいろいろなおことをおっしゃつて、幼い子のことまでご心配になつたのが、まこともつたいなくて、また一人前でもない身分の者にとつては、かえつてまことに恥ずかしく、誰にもどのような関係などとは知らせませんで、出来ない子供たちをも皆参上させまして、お仕えさせましょう、と申しておりました」

と申し上げる。

「なるほど、見栄えのしない親戚付き合ひのようだが、帝にも、その程度の身分の人の娘を差し上げなかつたことがあるうか。それに、前世からの因縁で、寵愛なさるのを、人が非難することであるうか。臣下では、また、卑しい女や、いったん結婚した女などをもつてゐる例は多かつた。

あの介の娘であつたと、人が取り沙汰しても、自分の取り扱いが、そのことで汚点とされるような形で始まつたのならともかく、一人の子を亡くして悲しんでいる親の気持ちや、やはり娘の縁で面目を施すことができた、と分かる程度に、配慮は必ずしてやるう」とお思いになる。

「第七段 常陸介、浮舟の死を悼む」

あちらでは、常陸介が、やつて来て立つたままで、こんな時に、こうしておいでになるとは」と腹を立てる。長年、どこそこいらつしやるなどと、事実を知らせなかつたので、見すばらしい有様でおいでになるう」と思い言つてもいたが、京などにお迎えになつた後は、名譽なことで、などと知らせよう」と思つていたうちに、このような事になつてしまつたので、今は隠すことも意味がなくて、生前の有様を泣きながら話す。

大将殿のお手紙も取り出して見せると、貴人を崇めて、田舎者で、何事にも感心する人なので、びっくりして氣後れして、繰り返し繰り返し、

「まことにめでたいご幸運を捨ててお亡くなりになつた人だなあ。自分も殿の家来として、参上してお仕えていたが、近くにお召しになつてお使いになることはなく、たいそう氣高く思われる殿である。幼い子供たちのことをおっしゃつてくださったのは、頼もしいことだ」

などと、喜ぶのを見るにつけても、それ以上に、生きておいでになつたら」と思うと、臥し転んで泣けてくる。

介も今になつて泣くのであつた。その反面、生きていらした時には、かえつて、このような類の人を、お尋ねになるようなことはなかつたのだ。自分の過失によつて亡くしたのもお気の毒だ。慰めよう」とお思いになつたため、他人の非難は、こまごまと考えまい」とお思いなのであつた。

四十九日の法事などもおさせになるにつけても、いったいどういうことになつたのか」とお思いになるので、いずれにしても罪になることではなから、たいそうこつそりと、あの律師の寺でおさせになった。六十人の僧のお布施など、大がかりに仰せつけになっていた。母君も来ていて、お布施を加えた。

宮からは、右近のもとに、白銀の壺に黄金を入れて賜つた。人が見咎めるほどの大げさな法事は、おできになれず、右近の志として催したので、事情を知らない人は、どうして、このようになつたと言つた。殿の家来どもで、気心の知れた者ばかり大勢お遣わしになつた。

「不思議なこと。噂にも聞かなかつた方の法事を、こんなに立派にあそばす。いったい誰であろう。」

と、今になつて驚く人ばかりが多かつたが、常陸介が来て、主人顔でいるので、変だと人びとは見るのだった。少将が子を産ませて、盛大なお祝いをさせようと大騒ぎし、邸の中にない物は少なく、唐土や新羅の装飾をもしたのだが、限界があるので、まことに粗末な有様であつた。この御法事が、人目に立たないようになつたと思つたが、感じが格別であるのを見ると、もし生きていたらどんなにかと、わが身に比肩できない方のご運勢であつたなあと思つた。

宮の上も、誦経をなさり、七僧への饗応の事もおさせになつた。今になつて、このような人を持つていらしたのだ」と、帝までがお耳にあそばして、並々ならず大切に思つていた人を、宮にご遠慮申して隠していらしたのを、お気の毒にとお思いになつた。

二人のお方のご心中は、いつまでも悲しく、あいにくな横恋慕の最中に亡くなつてしまつては、ひどく悲しいが、浮気なお心は、慰められるかなどと、他の女に言い寄りなされることもだんだんとあるのだった。

あの殿は、このようにお心にかけて、何やかやとご心配なさつて、残つた人をお世話なさつても、やはり、言つて効のないことを、忘れがたくお思いになる。

「第一段 薫と小宰相の君の関係」

後の宮が、御軽服の間は、やはり里下がりしていらつしやるうちに、二の宮が式部卿におなりになつた。重々しくなつて、常には参上なさらない。この宮は、もの寂しくて何となく悲しい気分のまま、一品の宮のお側を慰め所としていらつしやる。器量の良い女房の顔で、まだよく御覧にならない者が、多く残つていた。

大將殿が、やつとのことで、たいそうこつそりと親しくなさつて、小宰相の君という女房で、器量なども美しげで、氣立ての良い人とお思ひであつた。同じ琴をかき鳴らす、その爪音や、撥の音が、誰にもまさつて、手紙を書き、何か言つのも、風流な事が加わつてゐるのだった。

この宮も、長年、とても関心を寄せていらつしやつて、いつものように、悪口おつしやるが、どうして、そのようにありふれた女でいようかと、氣強く従わないのを、真面目人間は、少しは他の女と違つてゐる」とお思ひなのであつた。このように物思ひに沈んでいらつしやるのを知つていたので、思い余つて差し上げた。

「お悲しみを知る心は誰にも負けませんが、一人前でもない身では遠慮して消え入らなければかりに過ごしております。亡くなつた方と入れ替れるものだから」

と、由緒ある紙に書いてあつた。何となくしみじみとした夕暮で、しみりした時に、まことによく推察して言つて来たのも、氣が利いている。

「無常の世を長年見続けて来たわが身でさえ、人が見咎めるまで嘆いてはいないつもりでしたが、このお見舞いのお礼には、悲しい折柄、ひとしお嬉しかった」

などと言ひに立ち寄りなつた。たいそう氣恥ずかしくなるほど堂々と、普段はこのようにはお立ち寄りなさらず、人柄もご立派なのに、たいそうささやかな住まいである。局などと言つて、狭く何程もない遣戸口に寄つていらつしやるのは、体裁悪く思われるが、そうは言つてもむやみに卑下することもなく、とても良い具合にお話など申し上げる。

「亡き人よりも、この人は奥ゆかしい感じが加わっているな。どうして、このように出仕したのだろう。そのような人として、わたしも側に置いたらよかつたものを」

とお思になる。密やかな心の内は、少しもお見せにならない。

「第二段 六条院の法華八講」

蓮の花の盛りに、法華八講が催される。六条院の御ため、紫の上のなどと、皆それぞれに日をお分けになって、お経や仏などを供養あそばして、莊嚴に、立派に催された。五巻目の日などは、大変な見物だったので、あちらこちら、女房の縁故をたどって、見物に来る人が多かつた。

五日という朝座で終わって、御堂の飾りを取り外し、お部屋飾りつけを改めるので、北の廂も、襖障子なども外してあつたので、皆が入り込んで整えている間、西の渡殿に姫宮はいらうしやつた。お経を聞き疲れて、女房たちもそれぞれの局にいて、御前はたいそう人少なな夕暮に、大将殿は、直衣に着替えて、今日退出する僧の中に、是非にお話なさらなければならぬ事があつたので、釣殿の方にいらうしやつたが、皆が退出してしまつたので、池の方で涼みなさつて、人も少ないので、さきほどの小宰相の君などが、仮に几帳などを立てて、ちよつと休むための上局にしていた。

「ここであるうか、衣ずれの音がする」とお思になつて、馬道の方の襖障子が細く開いているところから、そつと御覧になると、いつもそのような女房がいる感じと違って、広々と整頓されているので、かえつて、几帳などがいくつもはずに立ててあつて見通されて、丸見えである。

氷を何かの蓋の上に置いて割ろうとして、騒いでいる女房たち、大人三人ほどと、童女とがいた。唐衣も汗衫も着ず、みな打ち解けていたので、御前とはお思いでないが、白い薄物のお召物を着ていらうしやる人で、手に氷を持ちながら、このように騒いでいるのを、少しほほ笑んでいらうしやるお顔、何とも言いようもなくかわいらしげである。

ひどく暑さの堪えがたい日なので、うるさい御髪が、暑苦しくお思いなされるのであろうか、少しこちら側に靡かして引いている様子、何物にも警えようがない。大勢美しい女性を見て来たが、似ている人は誰もいない

なあ」と思われる。御前の女房は、まこと土人形のような気がするのを、冷静になつて見ていると、黄色い生絹の単衣に薄紫色の裳を着ている女で、扇をちよつと使っているところなど、いかにも嗜みがあるなあ」と、ふと見えて、

「かえつて、氷を扱うのに、とても暑苦しそうです。ただ、そのまま御覧なさい」

と言つて、にっこりしている目もと、愛嬌がある。声を聞くと、この目指している女と分かつた。

「第三段 小宰相の君、氷を弄ぶ」

無理して割つて、それぞれの手に持つていた。頭の上に置いたり、胸に当てたりなど、体裁の悪い恰好をする女もいるのであろう。他の人は、紙に包んで、御前にもこのようにして差し上げたが、とてもかわいらしいお手を差し出しなさつて、拭かせなされる。

「いえ、持てません。雫が嫌です」

とおつしやるお声、とてもかすかに聞くのも、この上なく嬉しい。「まだとても幼くいらしたときに、わたしも、何も分らず拝見したとき、何とかわいらしい姫宮か、と拝見した。その後は、まづたく姫宮の様子をさえ聞かなかつたが、どのような神仏が、このような機会をお見せになつたのであろうか。いつもの、心安からず物思いをさせようとするのであろうか」と、一方では落ち着かず、じつと見つめて佇んでいると、こちらの対の北面に住んでいた下臈の女房が、この襖障子は、急ぎの用事で、開けたままで下りて来たのを思い出して、人が見つけて騒いだら大変だ」と思つたので、あわてて入つて来る。

この直衣姿を見つけて、誰だろう」とびっくりして、自分の姿を見られることも構わず、簀子からずんずんやって来たので、ふと立ち去つて、誰とも知られまい。好色なようだ」と思つて隠れなかつた。

この女房は、

「大変なことだわ。御几帳までを丸見えにしていたことだわ。右の大殿の公達であらうかしら。疎遠な方は、また、ここまでは来るはずがない。何か

の噂が立つたら、誰が襖障子を開けていたのだろうか、きつと出て来るだろう。単衣も袴も、生絹のように見えた方のお姿なので、誰もお気づきになることができなかったらう。」

と困りきつていた。

あの方は、だんだんと聖になつて来た心を、一度踏み外して、さまざまに物思いを重ねる人となつてしまつたなあ。その昔に出家遁世してしまつたら、今は深い山奥に住みついて、このよくな心を乱すことはないものを、などとお思い続けるにつけても、落ち着かない。」どうして、長年、お顔を拝見したものだと思つていたのであるう。かえつて苦しいだけで、何にもならないことであるのに。」と思つた。

「第四段 薫と女二宮との夫婦仲」

翌朝、起きなかつた女宮の御器量が、とても美しくいらつしやるようなのは、この宮よりもきつとままつていらつしやるだろうか。」と思ひながら、もつと似たく似ていらつしやる。驚くほど上品で、何とも言えないほどの様子だなあ。一つには気のせいか、時節柄か。」とお思ひになつて、ひびく書いね。これより薄いお召し物になさいませ。女性は、変わった物を着ているのが、その時々につけ趣があるものです。」と言つて、あちらに参上して、大式に、薄物の単衣のお召し物を、縫つて差し上げよと申せ。」とおっしゃる。御前の女房は、宮の御器量がたいそう女盛りでいらつしやるのを、さらに引き立てようとなさる。」とおもしろく思つていた。いつものように、念誦をなさる。」自分のお部屋にいらつしやつたりなどして、昼頃にお渡りになると、お命じになつていたお召し物が、御几帳に懸けてあつた。

「どうして、これをお召しにならないのか。人が大勢見る時に、透けた物を着るのは、はしたなく思われる。今は構わないでしよう。」

と言つて、ご自身でお着せなさる。御袴も昨日のと同じ紅色である。御髪が多さや、裾などは負けないが、やはりそれぞれの美しさなのか、似るはずもない。氷を召して、女房たちに割らせなさる。取つて一つ差し上げなどなさる、心の中もおもしろい。

「絵に描いて、恋しい人を見る人は、いないだろうか。ましてこの宮は、気持ち慰めるのに似つかわしからぬご姉妹であると思つたが、昨日あのようにして、自分があの中に混じつていて、心ゆくまで拝することができたなら。」と思つと、われ知らずのうちに溜息が漏れてしまつた。

「一品の宮に、お手紙は差し上げなさいましたか。」

とお尋ね申し上げなさると、

「内裏にいたとき、主上が、そのようにおつしやつたので差し上げましたが、長いことそういたしてません。」

とおつしやる。

「臣下におなりあそばしたといつて、あちらからお便りを下さらないのは、情けないことです。今、大宮の御前に、お恨み申されています、と申し上げよう。」

とおつしやる。

「どうしてお恨み申していきましょう。嫌ですわ。」

とおつしやるので、

「身分が低くなつたからといつて、軽んじていらつしやるようだ、と思われるので、お便りも差し上げないのです、と申し上げましょう。」

とおつしやる。

「第五段 薫、明石中宮に對面」

その日は過して、翌朝に大宮に参上なさる。いつものように、宮もいらつしやつた。丁子色に深く染めた薄物の単衣を、濃い縹色の直衣の下に召していらつしやつたのは、たいそう好感がもてる女宮のお姿が素晴らしかつたのにも負けず、白く清らかで、やはり以前よりは面瘦せなさつていは、とても見栄えがする。

似ていらつしやるを見ると見るにつけても、まつさきに恋しいのを、まことにけしからぬこと、と抑えるのは、拝見しなかつた時よりもつらい。絵をとてたくさん持たせて参上なさつたが、女房を介して、あちらに差し上げなさつて、ご自分もお渡りになつた。

大将も近くに参り寄りなかつて、御八講が立派であつたことや、昔の御

事を少し申し上げながら、残っている絵を御覧になる折に、

「わたしの里にいらつしやるに皇女が、宮中から離れて、思い沈んでいらつしやるのが、お気の毒に拝されます。姫宮の御方から、お便りもございませんのを、このように身分が決定なされたので、お見捨てあそばされたように思つて、気の晴れない様子ばかりしておりますが、こうした物を、時々お見せ下さいませ。わたしが直接持つて参りますのも、また、張り合ひのないものです」

と申し上げなされると、

「変なご。どうしてお見捨て申し上げなさいませう。内裏では、近かつたことにつけて、時々手紙のやりとりをなさつたようですが、別々におなりになつた時から、滞りがちになつたのでしよう。これから、お促し申し上げましよう。そちらからどうして差し上げなされないのですか」

と申し上げなされると、

「あちらからは、どうしてできませんようか。もともとお心に懸けていただけなかつたとしても、こうして親しく伺候します縁にことよせて、お心を懸けてくださいましたら、嬉しいことでございます。それ以上に、そのように親しくなさつていたのを、今お見捨てになるのは、つらいことでございます」

と申し上げなされると、好色心があるのか」とは思いよりなさなかつた。お立ちになつて、先夜のお目当ての女に会おう。先日渡殿も慰めに見よう」とお思いになつて、御前を渡つて、西の方角にいらつしやるのを、御簾の内側の女房は特に緊張する。なるほど、たいそう風采よく、この上ない身のこなしで、渡殿の方では、左の大殿の公達などが座つていて、何か言つている様子がするので、妻戸の前にお座りになつて、

「よく参上はいたしますが、ごちらの御方にはお目にかかることも、めつたにございませんで、いつのまにか、老人めいた気持ちでございますが、今からは、と気を奮い起こしまして。不似合いな振る舞いだ、若い人たちは思つてしよう」

と、甥の公達の方を御覧になる。

「今からお馴染みになられたら、なるほど若返りなされるでしょう」
などと、とりとめもないことを言う女房たちの様子も、不思議と優雅で、

風情のあるごちらの御方の様子である。特に用事ということはないが、世間話などをしながら、しんみりと、いつもよりは長居なされた。

「第六段 明石中宮、薫と小宰相の君の関係を聞く」

姫宮は、あちらにお渡りあそばした。大宮が、

「大将がそちらに参つたが」

とお尋ねになる。お供して参つた大納言の君が、

「小宰相の君に、何かおつしやるつことので、ございませう」

と申し上げると、

「いつもの、真面目人間が、やはり女性に心を止めて話をするのは、気のきかない人でしたら困ります。心の底も見透かされるでしょう。小宰相などは、とても安心です」

とおつしやつて、ご姉弟であるが、この君を、やはり恥ずかしく思い、女房たちも不注意に應對しないでほしい」とお思いになつていた。

「どの女房よりも心をお寄せになつて、夜が更けてお帰りになる時々もございましたが、普通のお話を親密になつて、夜が更けてお帰りになる時々もございましたが、普通のお話よりふれた色恋沙汰ではないのでしようか。宮を、とても情けないお方と思つて、お返事さえ差し上げないようでございます。恐れ多いこと」と言つて笑つと、宮もにっこりあそばして、

「ひどく見苦しい様子を知つておもしろい。何とかして、あのようなお癖を止めさせ申したいものです。恥ずかしいね、そなたたちの手前も」

とおつしやる。

「第七段 明石中宮、薫の三角関係を知る」

「とても不思議な事を聞きました。この大将殿が亡くしなされた人は、宮の二条の北の方のお妹君でした。異腹なのでしよう。常陸の前の介の何某の妻は、叔母とも母とも言つていますのは、どういふものでしょうか。その

女君に、宮が、まことにこつそりとお通いになりました。

大将殿がお聞きつけになったのでしようか。急遽お迎えなさろうとして、番人を増やしなどして、嚴重になさっているところに、宮も、とてもこつそりとお通いになりながら、お入りになることができず、粗末な姿で、お馬に乗って立つたまま、お帰りになりました。

女も、宮をお慕い申し上げていたのでしょうか、急に消えてしまいました。が、身投げしたようだと行って、乳母などの女房は、泣き暮れておりました。

と申し上げる。大宮も、「まことに呆れたことだ」とお思いになって、

「誰が、そのようなことを言うのですか。お気の毒な情けないことですね。それほど珍しい事は、自然と噂になるうものを。大将もそのようには言わないで、世の中のはかなく無常なこと、このような宇治の宮の一族の短命であつたことを、ひどく悲しんでおっしゃっていたが」

とおっしゃる。

「さあ、下衆は、確かでないことも申すものを、と思えますが、あちらに仕えておりました下童が、つい最近、小宰相の君の実家に出て参つて、確かなことのように言いました。このように不思議に亡くなったことは、誰にも聞かせまい。大げさで、気味の悪い話だからといって、ひどく隠していたことか。そうして、詳しくはお聞かせ申し上げなかつたのでしよう」と申し上げると、

「まうたく、このような話は、一度と他人には話さないように、と言わせなさい。このような色恋沙汰で、お身の上を過ち、世人に軽々しく響きをおかになることになりましょう」とたいそうご心配になった。

第六章 薫の物語 薫、断腸の秋の思い

「第一段 女一の宮から妹二の宮への手紙」

その後、姫宮の御方から、二の宮にお便りがあつたのだつた。ご筆跡な

どが、たいそうかわいらしそうなものを見るにつけ、実に嬉しく、こうしてこそ、もっと早く見るべきであつた」とお思いになる。

たくさんのお趣のある絵をたくさん、大宮も差し上げあそばした。大将殿は、それ以上に趣のある絵を集めて、差し上げなされる。芹川の大將が遠君の、女一の宮に懸想をしている秋の夕暮に、思いあまつて出かけて行つた絵が、趣深く描けているのを、とてもよくわが身に思い当たるのである。あれほどまで思い靡いてくださる方があつたら、と思うわが身が残念である。

「萩の葉に露が結んでいる上を吹く秋風も、夕方には特に身にしみて感じられる」

と書き添えたと思うが、

「そのようなのを少しの様子にでも漏らしたら、とてもやつかいそんな世の中であるから、ちよつとしたことも、ちらつと出すことができない。このようにいろいろと何やかやと、憂愁を重ねた果てに思うことは、亡き大君が生きていらつしゃつたら、どうして他の女に心を傾けたりしようか。

今上の帝の内親王を賜うといつても、頂戴はしなかつたらうに。また、そのように思う女がいるとお耳にあそばしながら、このようなことはなかつたらうが、やはり情けなく、わたしの心を乱しなかつた宇治の橋姫だなあ」と思い余つて、また宮の上で執着して、恋しく切なく、どうにもしようがないのを、馬鹿らしく思うまで悔しい。この方に思い悩んで、その次には、呆れた恰好で亡くなつた人が、とても思慮浅く、思いとどまるところのなかつた軽率さを思いながら、やはり大変なことになつたと、思いつめていたほどを、わたしの態度がいつもと違つていると、良心の呵責に苛まれて嘆き沈んでいた様子を、お聞きになつたことも思い出されて、

「重々しい方としての扱いでなく、ただ気安くかわいらしい愛人としておこつと、思つたわりには、実にかわいらしい人であつたよ。思い続けると、宮をお恨み申すまい。女をもひどいと思うまい。ただわが人生が世間ずれしていない失敗なのだ」

などと、物思いに耽りなされる時々が多かつた。

「第二段 侍従、明石中宮に出仕す」

悠長で、自制心が強くいらつしやる人でさえ、このような方面には、身も苦しいことが自然と出て来るのを、宮は、彼以上に慰めかねながら、あの形見として、尽きない悲しみをあつしやる相手さえいないが、対の御方だけは、かわいそつに「などとあつしやるが、深く親しんでいらつしやるなかつた、短い交際であつたので、とても深くはどうしてお思いにならうか。また、お気持ちのままに、恋しい、悲しい」などとあつしやるのは、気がひけるので、あちらにいた侍従を、例によつて、迎えさせなかつた。

皆女房たちは散り散りになつて、乳母とこの人ら二人は、特別に目をかけてくださったのも忘れることができず、侍従は身内外の女房であるが、やはり話相手として暮らしていたが、どこにもないような川の音も、何か嬉しいこともあるうか、と期待していたうちは慰められたが、気持ち悪く大變に恐ろしくばかり思われて、京で、みすばらしい所に、最近来ていたのを、捜し出しなかつて、

「こつして仕えていなさい」

とおつしやるが、お心はお心としてありがたいが、女房たちが噂するのでも、そのような方面のことが絡んでいるところでは、聞きにくいこともあろう」と思つと、お引き受け申さない。後の宮にお仕えしたい」と希望したので、

「とても結構なことだ。それでは内々に目をかけてやろう」

とおつしやるのだった。心細く頼りとするところのないのも慰むことがあろうかと、縁故を求めて出仕した。「小ざつぱりとしたまあまあの下臈だ」と認めて、誰も非難しない。大將殿もいつも参上なさるのを、見るたびごとに、何となくしみじみとする。とても高貴な大家の姫君ばかりが、大勢いらつしやる宮邸だ」と女房が言つのを、だんだん目をとめて見るが、やはりお仕えしていた方に似た美しい姫君はいないものだ」と思つている。

「第三段 匂宮、宮の君を浮舟によそえて思つ」

今年の春お亡くなりになつた式部卿宮の御娘を、継母の北の方が、特にかわいがらないで、その兄の右馬頭で人柄も格別なところもないのが、心を寄せているのを、不憫だとも思わずに縁づけている、とお耳にあそばし

たことがあつて、

「お気の毒に。父宮がたいそう大切になさつていた女君を、つまらないものにしてしまおうとは」

などと仰せになつたので、ひどく心細くばかり思い嘆いていらつしやる有様で、

「やさしく、このようにあつしやつてくださるものを」

などと、ご兄妹の侍従も言つて、最近迎え取らせなかつた。姫宮のお相手として、まことに最適のご身分の方なので、高い身分の方として特別の扱いで伺候なさる。決まりがあるので、宮の君などと呼ばれて、裳くらははお付けになるのが、ひどくおいたわしいことであつた。

兵部卿宮は、この宮くらはは、恋しい人に思いよそえられる様子をしていようか。父親王は兄弟であつた」などと、例のお心は、故人を恋い慕いなさるにつけても、女を見たがる癖がやまず、早く見たいとお心にかけていらした。

大將は、非難がましいことを言いたくなることだ。昨日今日という間に、春宮に差し上げようかななどお思いになり、わたしにもそのようなご様子をほのめかされたのだ。このように無常な世の中の衰退を見ると、川の底に身を沈めても、非難されないことだ」などと思ひながら、誰よりも同情をお寄せ申し上げなかつた。

この院にいらつしやるのを、内裏よりも広く興趣あつて住みよい所として、いつもは伺候していない女房どもも、みな気を許して住みながら、広々とたくさんある対の屋や、渡廊や、渡殿などにいっぱいいる。

左大臣殿は、昔のご様子にも負けず、すべてこの上もなくお世話申し上げていらつしやる。盛んになつたご一族なので、かえつて昔以上に、華やかな点ではまさるのであつた。

この宮は、いつものお心ならば、幾月かの間に、どのような好色事でもなさつていたところが、すっかり落ち着きなかつて、傍目には、少しは大人びてお直りになつたなあ」と見えるが、最近再び、宮の君に、ご本性を現して、まつわりつきなさるのであつた。

「第四段 侍従、薫と匂宮を覗く」

涼しくなつたといつて、后宮は、内裏に帰参なさるうとするので、

「秋の盛りは、紅葉の季節を見ないというのは」

などと、若い女房たちは残念がつて、みな参集している時である。池水に親しみ月を賞美して、管弦の遊びがひっきりなしに催され、いつもより華やかなので、この宮は、このような方面では実にこの上なく賞賛される。朝夕に見慣れていても、やはり今初めて見た初花のようなお姿でいらつしやるが、大将の君は、あまりそれほど入り込んだりなさらないので、こちらが恥ずかしくなるような気のおける方だと、みな思っていた。いつもの、お二方が参上なさつて、御前にいらつしやる間に、あの侍従は、物蔭から覗いて拝すると、

「どちらの方なりとも縁付いて、幸運な運勢に思えたご様子で、この世に生きておいでだつたらなあ。あきれるほどあつけなく情けなかつたお心であつたよ」

などと、他人には、あの辺のことは少しも知っている顔をして言わないことなので、自分一人で尽きせず胸を痛めている。宮は、内裏のお話など、こまごまとお話申し上げあそばすので、もうお一方はお立ちになる。「見つけられ申すまい。もう暫くの間は、ご一周忌も待たないで薄情な人だ、と思われ申すまい」と思つて、隠れた。

「第五段 薫、弁の御許らと和歌を詠み合う」

東の渡殿に、開いている戸口に、女房たちが大勢いて、話などをひっそりとしている所にいらして、

「わたしをこそ、女房は親しみやすくお思になるべきではありませんか。女でさえこのように気のおけない人はいません。それでもためになることを、教えて上げられることもあります。だんだんとお分かりになりそうですから、とても嬉しいです」

とおっしゃるので、とても答えにくくばかり思っている中で、弁のおもごとく、物馴れている年配の女房が、

「そのよつにも親しくすべき理由のない者こそ、気兼ねなく振る舞えるので

はないでしようか。物事はかえつてそのようなものです。必ずしもその理由を知つたうえで、くつろいでお話し上げるといふのもございませんが、あれほど厚かましが身についているわたしが引き受けないのも、見ていられますんで」

と申し上げると、

「恥じる理由はあるまい、とお決めになつていらつしやるのが、残念なことです」

などと、おつしやりながら見ると、唐衣は脱いで押しやつて、くつろいで手習いをしていたのであろう、硯の蓋の上に置いて、頼りなさそうな花の枝先を手折つて、弄んでいた、と見える。ある者は几帳のある所にすべり隠れ、またある者は背を向けて、押し開けてある妻戸の方に、隠れながら座つている、その頭の恰好を、興味あると一回り御覧になつて、硯を引き寄せて、

「女郎花が咲き乱れている野辺に入り込んで、露に濡れたという噂をわたしにお立てになれましようか。どなたも気を許してくださいとさらないので」

と、ちよつどこの襖障子の後向きしていた女房にお見せになると、身動きもせずに、落ち着いて、すぐさま、

「花と申せば名前からして色つばく聞こえますが、女郎花はそこの露に靡いたり濡れたりしません」

と書いた筆跡は、ほんの一首ながら、風情があつて、だいたいに無難なので、誰なのだろう、とお思になる。今参上した途中で、道をふさがれどどまっていた者らしい、と思つ。弁のおもとは、

「まことにはつきりした老人めいたお言葉、憎うございます」と言つて、旅寝してひとつ試みて御覧なさい。女郎花の盛りの色にお心が移るか移らないか。そうして後に、お決め申し上げます」

と言つので、

「お宿をお貸しくださるなら、一夜は泊まつてみましょう。そこの花には心移さないわたしですが」

とあるので、

「どつして、恥をおかせなさいませ。普通にいう野辺のしやれを申し上げただけです」

と言つ。とりとめのないことをほんのちよつとおつしやつても、女房はその続きを聞きたくばかりお思い申し上げていた。

「うっかりしてました。道を開けますよ。特に意識して、あちらで恥ずかしくつていらやる理由が、きつとありそうな折ですから」

と言つて、お立ちになると、「だいたいこのような奥ゆかしいところがないだろう」とご想像なさるもがつらい」と思つてゐる女房もいた。

「第六段 薫、断腸の秋の思い」

東の高欄に寄り掛かつて、夕日の影るにつれて、花が咲き乱れている御前の叢をお眺めやりになる。何となくしみじみと思われて、中んづく腸の断ち切れる思いがするのは秋の空だ」という詩句を、たいそう密やかに朗誦しながら座つていらつしやつた。先程の衣ずれの音が、はつきり聞こえる感じがして、母屋の襖障子から通つてあちらに入つて行くようである。宮が歩いていらして、

「こちらからあちらへ参つたのは誰か」

とお尋ねになると、

「あちらの御方の中將の君です」

と申し上げるのである。

「やはり、けしからぬ振る舞いだ。誰だろつかと、ちよつとでも関心を持つた人に、そのままこのように遠慮なく名前を教えてくださいまうとは」と、気の毒で、この宮に、皆が馴れ馴れしくお思い申し上げているようなのも残念だ。

「無遠慮につつこんだお振る舞いに、女はきつとお負け申してしまおう。わたしは、まことに残念なことに、こちらの一族には、悔しくも残念なことばかりだ。何とかして、こちらの女房の中にも、珍しいような女で、例によつて熱心に夢中になつていらつしやる女を口説き落として、自分が経験したように、穏やかならぬ気持ちを思わせ申し上げたい。ほんとうに物事の分かる女なら、わたしの方に寄つて来るはずだ。けれども難しいことだな。人の心というものは」

と思つにつけても、対の御方の、あのお振る舞いを、身分にふさわしくないものとお思い申し上げて、まことに不都合な關係になつて行くのが、そ

の世間の評判をつらいと思ひながらも、やはりすげなくはできない者とお分かりになつてくださるのは、世にもまれな胸をつつことである。

「そのような氣立ての方は、大勢の中にいようか。立ち入つて深くは知らないので分からないことだ。寢覚めがちに所在ないのを、少しは好色も習つてみたいものだ」

などと思つが、今はやはりふさわしくない。

「第七段 薫と中將の御許、遊仙窟の問答」

例によつて、西の渡殿を、先日真似て、わざわざいらつしやつたのも変なことだ。姫宮は、夜はあちらにお渡りあそばしたので、女房たちが月を見ようとして、この渡殿でくつるいで話をしてゐるところであつた。箏の琴がたいそうやさしく弾いてゐる爪音が、興味深く聞こえる。思いがけないところにお寄りになつて、

「どうして、このように人を焦らすようにお弾きになるのですか」

とおつしやると、皆驚いたにちがいないが、少し巻き上げた簾を下ろしなどもせず、起き上がつて、

「似ている兄様が、ございませうか」

と答える声は、中將のおもとか言つた人であつた。

「わたしこそが、御母方の叔父ですよ」

と、戯れをおつしやつて、

「いつものように、あちらにいらつしやるようですね。どのようなことを、この里下がりのご生活の中になさつておいでですか」

などと、つまらないことをお尋ねになる。

「どちらにいらしても、同じことです。ただ、このような事をしてお過ごしでいらつしやるようです」

と言つと、結構なご身分の方だ、と思つと、わけもない溜息を、うつかりしてしまつたのも、変だと思ひ寄る人があつては「と紛らわすために、差し出した和琴を、ただそのまま掻き鳴らしなせる。律の調べは、不思議と季節に合うと聞こえる音なので、聞き憎くもないが、最後までお弾きにならないのを、かえつて気がもめると、熱心な人は、死ぬほど残念がる。

「わたしの母宮もひけをおとりになる方だろうか。后腹と申し上げる程度の相違だが、それぞれの父帝が大切になさる様子に、違いはないのだ。がやはり、こちらのご様子は、たいそう格別な感じがするのが不思議なことだ。明石の浦は奥ゆかしい所だ」などと思いつけることの中で、自分の宿世は、とてもこの上ないものであった。その上に、並べて頂戴したら」と思うのは、とても難しいことだ。

「第八段 薫、宮の君を訪ねる」

宮の君は、こちらの西の対にお部屋を持っていた。若い女房たちが大勢いる様子で、月を賞美していた。

「まあ、お気の毒に、こちらと同じ皇族の方であるの」

とお思い出し申し上げて、父親王が、生前に好意をお寄せになっていたものを」と口実にして、そちらにお出でになった。童女が、かわいらしい宿直姿で、二、三人出て来てあちこち歩いたりしていた。見つけて入る様子なども、恥ずかしそうだ。これが世間普通のことだと思つた。

南面の隅の間に近寄つて、ちよつと咳払いをなさると、少し大人めいた女房が出て来た。

「人知れず好意をお寄せ申しておりますので、かえつて、誰もがい古るしてきたような言葉が、馴れない感じで、真似をしているようでございます。真面目に、言葉以外の表現を探さずにおられません」

とおつしやる、宮の君にも言い伝えず、利口ぶつて、

「まことに思いもかけなかったご境遇につけても、故父宮がお考え申し上げていらつしやうた事などが、思い出されましますなりませぬ。このように、折々にふれて申し上げてくださるといふ。蔭ながらのお言葉も、お礼申し上げます。いらつしやるようです」

と言つた。

「第九段 薫、宇治の三姉妹の運命を思つ」

「世間並の扱いのよう、失礼ではないか」と気が進まないの、

「もともと見捨てられない問柄としてよりも、今はそれ以上に、何か必要なことにつけても、お声をかけてくださつたら嬉しく存じます。よそよしく人を介してなどでしたら、とてもお伺いできません」

とおつしやるので、おつしやるとおりだ」と、あわてて気づいて、宮の君を揺さぶるらしいので、

「松も昔の知る人もいないとばかりに、つい物思いに沈んでしまいます。ついても、もとの縁などとおつしやる事は、ほんとうに頼もしく存じられます」

と、人を介してというのでなくおつしやる声、まことに若々しく愛嬌があつて、やさしい感じが具わつていた。ただ普通のこのような局住まいをする人と思へば、とても趣があるにちがいないが、ただ今では、どうしてほんのわずかでも、人に声を聞かせてよいという立場に馴れておしまひになつたのだろう」と、何となく気になる。容貌などもとても優美である。と、見たい感じがしているが、「この人は、また例によつて、あの方のお心を掻き乱す種になるにちがひなからうと、興味深くもあり、めつたにいななものだ」とも思つていらつしやうた。

「この方こそは、貴いご身分の父宮が大切にお世話して成人させなかつた姫君だ。また、この程度の女なら他にもそう多くいよう。不思議であつたことは、あの聖の近辺に、宇治の山里に育つた姫君たちで、難のある方はいなかつたことだ。この、頼りないな、軽率だな、などと思われる女も、このようにちよつと会つた感じでは、たいそう風情があつたものだ」

と、何事につけても、ただあの一族の方をお思い出しなさるのであつた。不思議と、またつらい縁であつた一つ一つを、つくづくと思ひ出し物思いにふけていらつしやる夕暮に、蜻蛉が頼りなさそうに飛び交つていのを、

「そこにいると見ても、手には取るこのできない。見えたと思つとまた行く方知れず消えてしまつた蜻蛉だ。あるのか、ないのか」

と、例によつて、独り言をおつしやうた、とか。

